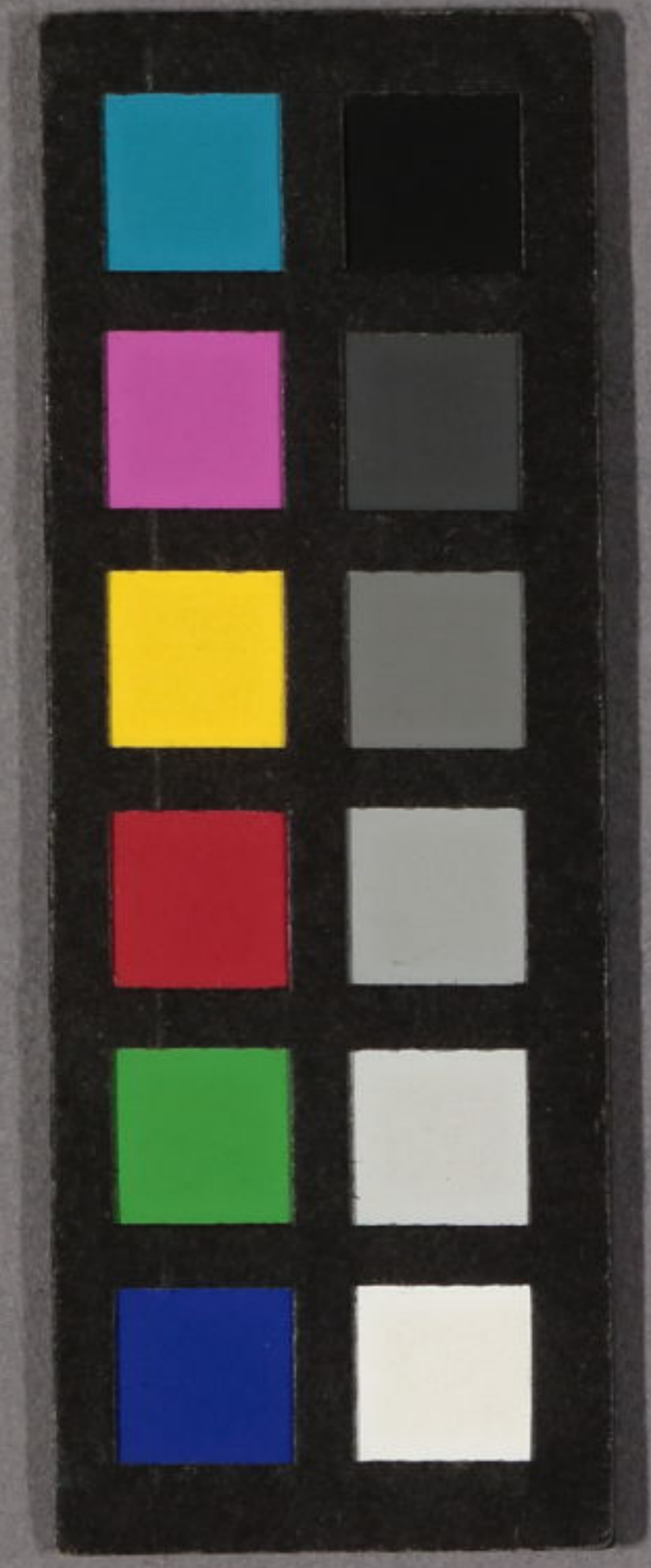


神皇正統記

三

^ 13  
3165  
3



門 へ 13  
號 3165  
卷 3

昭和九年  
九月二十八日  
購求

第九回 迷唄三人娘初編 卷之下

東都

松亭金水編次

第九回

子をあやあつた親おやの心の切きりある。いそぐと知しると人ひと情なさけも。浮うき世よの義理ぎりと他人たにんのち。その夜よお粥かゆが家いえ出て。往方ゆくへ知しまぬがたまゑの。情なさけなき女児むすめと怒いらいり果たまの涙なみだの雨あま侶りよひ殊ことさら母ははの病やまふの床とこ目め来きよして人ひと並なら不な勝かむ女児むすめの貞まこと守まもり。心こころ不な替かりて飛とぶるも。ゆるる天あま麻あ呂らの魅ま

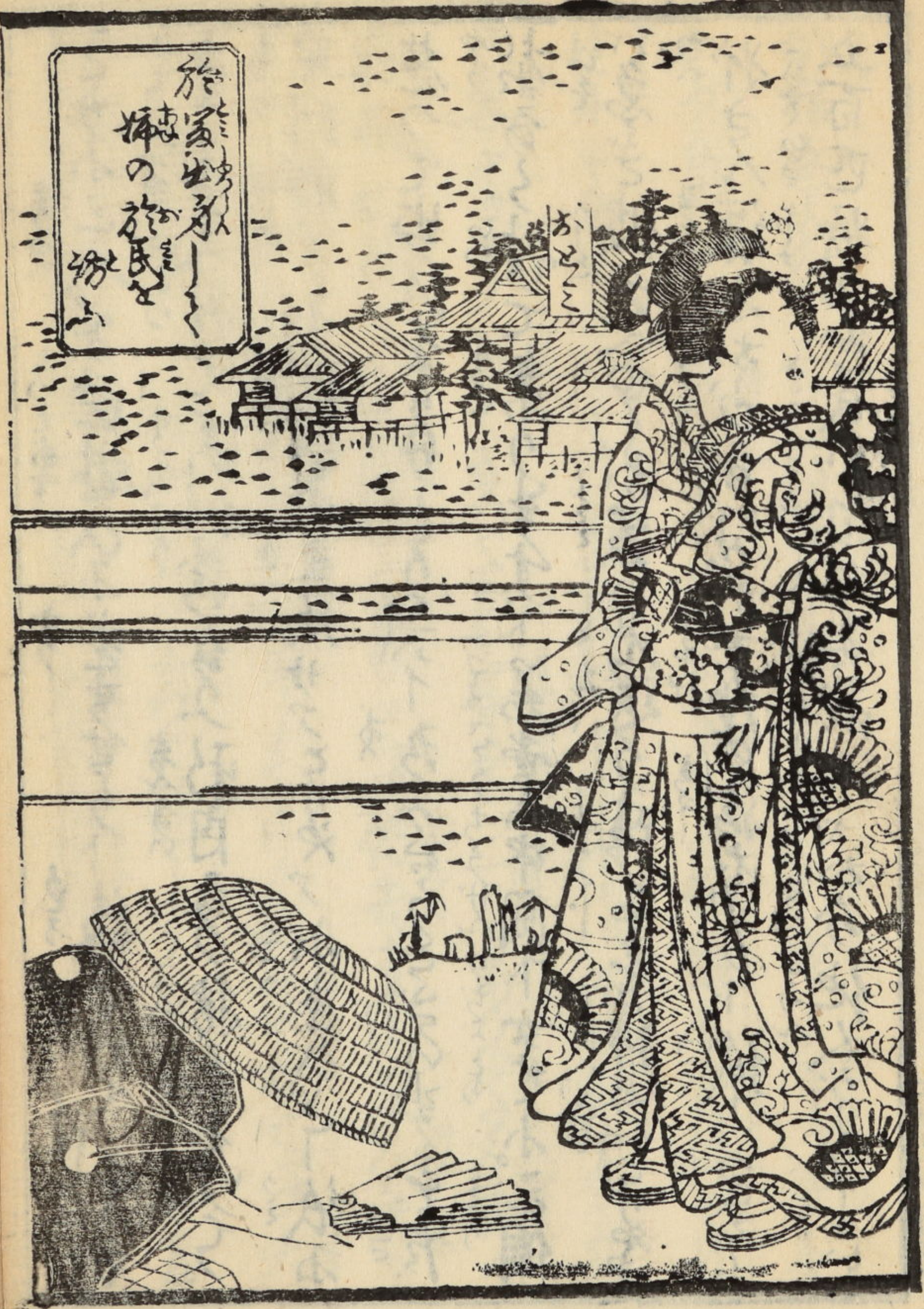
入つかるまきふあきあやまてあやまてあやま親同胞あやま不飲あやまきあやままあやまうあやまけあやま。人あやま不  
指あやまさあやまうあやま笑あやまのあやまはあやまくあやま己あやままあやまをあやまうあやまのあやま恥あやまらあやま。とあやま持あやま病あやまのあやま瘡あやまりあやまとあやま  
くあやま。寒あやまがあやまちあやま不あやまさあやまけるあやまがあやま相あやま減あやまるあやま人あやま由あやまとあやままあやまくあやま不あやま傳あやまくあやま咳あやま  
てあやま初あやま末あやまのあやま。そのあやま版あやまをあやま慰あやまさあやまめあやまくあやまらあやまぬあやまりあやまをあやま尋あやまねあやまんあやまと  
人あやまのあやままあやま由あやま不あやまああやまらあやまぬあやま。此あやま処あやま又あやま波あやま処あやまとあやまらあやまぬあやまゆあやま。又あやま不あやま知あやまれ  
ぬあやまらあやまぬあやま。日あやま殺あやま積あやまりあやまてあやまらあやまぬあやままあやまさあやまくあやままあやまりあやまくあやままあやまりあやまてあやまその  
明あやまもあやま年あやま次あやまらあやまるあやま女あやま兒あやまかあやま民あやまのあやま六あやま狭あやま不あやま選あやまてあやまぬあやま世あやまをあやままあやまりあやまぬあやま。都  
心あやまのあやままあやまさあやまくあやまとあやま孫あやま物あやまをあやままあやまるあやま人あやまああやまるあやまをあやま僥あやま倖あやま不あやまとあやまらあやまぬあやま。都

下二

傳あやま内あやまとあやま名あやま不あやま傳あやまへあやまるあやま傳あやま優あやまのあやま座あやま不あやま出あやまてあやま幸あやま不あやま散あやまらあやまぬあやま  
かあやまるあやま中あやまのあやまとあやままあやまらあやまぬあやま。世あやま間あやまのあやま人あやま由あやま款あやま待あやまをあやま幸あやま野あやま傳あやま吉あやまのあやま二十あやま五  
六あやま男あやま振あやまさあやまくあやま陋あやましあやまらあやまぬあやま。こあやままあやまらあやまぬあやま入あやまらあやまぬあやま生あやま中あやまのあやま高あやま齋あやま  
よりあやま倍あやまらあやまぬあやま。とあやま終あやま不あやま傳あやま吉あやまがあやま新あやま婦あやまとあやまああやまらあやまぬあやま。まあやまらあやまぬあやま二あやま年あやまを  
送あやまらあやまぬあやま。とあやま幸あやまのあやま女あやま兒あやまのあやまおあやま家あやまのあやま十あやま二あやま母あやまにあやま不あやまたあやま病あやま身あやま  
ああやまらあやまぬあやま。既あやま不あやまらあやまぬあやま年あやま世あやまをあやままあやまりあやまぬあやま。然あやまるあやまにあやま不あやまたあやま家あやま由あやま年あやま以あやまるあやま不あやま  
家あやま不あやまああやまらあやまぬあやま。とあやま一あやま借あやま神あやまのあやまああやまらあやまぬあやま家あやま老あやま世あやま日あやま  
報あやま負あやまのあやま責あやまをあやま清あやまがあやま幸あやま不あやま出あやま入あやまのあやま底あやまをあやままあやまりあやま。とあやまああやまらあやまぬあやま方あやま不

侍ら。侍女不出。家跡をば。之男あること。由男の  
 花を弁不譲らんと。手為等。飯盤を指あり。孝友用の  
 花ををちのせ。成人を候。やど小。実。四月日。小。冥守  
 ありけり。脱不十八。菜。小。ありける。とき。父。花。去。来。由  
 祥世の。係。て。老。太。帝。の。美。来。る。が。う。そ。跡。を。更。継。一  
 だ。仕。の。ま。ま。お。の。今。の。千。膳。り。小。ありける。を。ど。別。家。さ。さ。さ。と。死  
 時。未。ぬ。ま。じ。と。美。を。系。が。嫁。も。た。く。困。ら。ふ。つ。り。て。その。ま。さ。小  
 ありけり。かくて。又。三。年。を。う。果。教。あ。く。さ。て。ある。年。の。二。月。の。下。旬。日。由

藤小虎。さらば。方。の。山。色。の。さ。さ。さ。と。咲。初。る。より。花。見。ん  
 と。老。さ。る。美。さ。さ。さ。と。ち。む。ま。と。て。東。の。比。叡。の。昔。祥。閣。音。羽。の  
 滝。あ。ら。ね。ど。も。ご。才。摸。ま。と。清。水。の。観。音。堂。の。傍。り。あり。  
 松。小。楓。不。枝。ら。ち。か。り。被。岸。様。の。教。を。ま。ま。ま。柳。の。系。を  
 さら。と。と。あ。り。貫。き。と。と。あ。ん。御。も。う。系。と。啣。つ。風。流。夫。風。流。女  
 由。さ。ら。集。會。つ。直。下。せ。ら。と。そ。名。小。あ。り。思。志。を。伝。の。池。小  
 ち。り。あ。る。さ。ら。波。磨。小。人。の。水。と。の。残。と。贅。さ。る。蓮。系。小。の。  
 水。不。浮。り。る。気。を。さ。さ。と。他。所。五。六。あ。ら。ぬ。風。雅。の。地。比。小



一町ひとまちの北きた木きのひんひんの秋あきの風かぜををのりのりくく船ふねの  
 舟ふねの帆ふしのは木き天てんがが鼓つづみ貝かい奏そうししるる香かう糖とう峰ほうののりりで  
 こゝろこゝろああららふふへへきき況わづらひやや春はるのの花はなのの比ひのの由よしああららねね糸いと地ぢ  
 ありありここふふ春はるのの船ふね板いた塙はたけ又また秋あきのの松まついいああららねねとと榎えののの格かぢ子こ  
 根ね府ふ川がはのの宵よ脱だつ石いし小こ主ぬしささくく麻あし一ひとくくちちりり糸いとのの構かまへへ程ほど  
 不ふ吹ふららるる鼓つづみのの音ね清きよくくとと声こゑ小こ唄うたのの節ふし礎いしささくく心こゝろのの涼すずささ  
 ありあり折をららるる表あはのの澄すみららるるをを徐ゆるくくとと引ひああけけてて下くだりりかかららののここ  
 ままららししままんん下くだりりのの声こゑ吹ふつつけけハハイイととままりりトト敷ふをを止とめてめて立た

ともふ二人ぞ。些遊び小老ませらう。後を向て「そ方  
 さま。山へ往てま似務る。形月あり。傍手不渡て。  
 申刻時ふ不遅ひ不素也。サアころぬア小まひご一紙ふ  
 惹つて出火をうけらう。ハイあがらうごごいませとた  
 ねある。往て糸のますト恙堂中。下女せ小。三個  
 いきざ彼方へゆく。お返いん送り障子を締め「ころぬ  
 御さん。僕ふお少るい。お土産の強むらう。紙小包ご  
 五百匹。扱のお良の氣の毒教。ヲヤおか他人がまうい。

三ツツウツ下五

此指ふとふお止ヨト推戻すのをまこと返。ナニ疎小  
 かがまこつて。お氣の毒どけまどまど。何指由。昔儂の自  
 由不ゆあう。あいらう。お少る。所う実不モウ。何の中。ゆ  
 の毒どヨ。サア温くあう。か茶を。ハイあう。ごころ。夫  
 左指と。扱さん。困つ。このり。ご子。侍。昔さん。とり。人。人。能  
 人。夫。似。合。ま。る。昔。人。と。安。ま。し。つ。け。が。何。指。ま。え。ア。夫  
 死を。同。左。指。サ。疎。不。実。ウ。あ。つ。て。乾。し。の。人。で。あ。つ。と。け。ま  
 ど。壽命。づ。く。の。往。方。う。あ。い。の。生。ま。む。昔。儂。う。と。く。ま。て。く。

十年をうると候不長て。夜をこましく替古を志とせし。女  
をこそあまに報小あちあア。人不買やうと由名のをあまご  
ころり人けとと。世名を由音併の時。傳吉不由劣らまの  
とまごとり人さうサ。そのお蔭あア。今あて才子由城  
を除あどあうら。後句傳吉せんが長と時より。宋まを  
もあうまは。あう何その時候うらと。お禮對庇之を  
あア。心細いと名つこが。あばあちの若大爺の。お氣不入  
大且羽も。あまさぬ由お死せるさう。今あアあちが契

さまの因縁ごとく。あまごころ。何時ど性てあま不かり。アハ  
由あの音併等。あまの持味不差ひる。ち振してま  
ば何ぞの助不。お持こ中。使りふるらうと。業作あつと  
あまけま。あまの方いか。借神。音併のう。流人。庇  
あをいも。大きまお遠ま。で竟く。往帰く。今あて。目  
不。おからん。血を沙汰をして。あま。今あちの身。女うら。  
持物の。容子をさる不。愈。流。物をうら。で。あま。あ  
一。あ。ち振して。今あちの大爺。由。風流。あのある

お方子うら「た振たぢ」風流ふうりゅうといふも由よしあるが世よもた満みち中ちゆうと  
まのつづる望のぞみの人のあつたあつてい振おけきとた振たぢを  
ありません然しかして私わたしの僥あや倖せあるとあやア何なにも欲ほいと  
いふものゝ由よし不ふ実じつてとまはるヨ「よ」あやアお方のあま愛あ  
が愛あいさうざりうあま「ア」折おきんを振おる否いな味あじい除のて疎そ  
おの人ひとでございまい「た振たぢ」之これとあやア実じつ不ふ僥あや倖せと  
今いまあやア老爺おやうぢさんお孫まごおさんお。お死し亡わうあさう「え」  
おの老らう太た帝ていおまご年としがらひず。お持もさんお満みちとて

三ツツ初下七

お在いと。お後ご對たい身みお由よし多たけとと何なに処ところお何なに振おと振お  
おさうの一向いこう風ふうの夜よりおあし疎そおる細こいあうとけきと  
おあがた振おりお所ところお在いとととと。お二に振おし「い」  
お中ちゆうおア折おしうあお。お是ぜ非ひおつひやまうヨ「ア」何なに卒そつ  
おておらんおさいまお今いま日ひ怨うらみおあつて外ほかのあつておあつて  
せんが昔むかしお今いまお侍さむらい女むすめおあつておけきと。おあつて  
おアおアお振おしとておあつておはるおと人ひとお公こうを五ご  
お表おもてお女むすめお房ふさおまはる。お不ふお能ねおあつて。お種たねと





恨とぞつて代りぐあひく圍るのサ。幾一も 出代りあふ  
今回へ世せ旅ぐあひくも年の性多のて重うとあふ  
一人ちやアか圍りぐあひ子も涙湯不性不も續てお  
出ろ子ニその性なるア隣の狭さん不侍んで性うう  
けきどかあやけろふ不自由でふト久しくをねと持  
妹隔のあゝぬあゝろ。世の救かさうくあろ碎ふる  
そのおろく遊びふやうく美堂辨女時刻ゆうとゆり  
くまふ民へ支等ふ氣と配り終り酒と蕎麦をて飲

侍補めお及びびる。お夏ハ持不喉と去。佐人引の  
帰りのけア

第六回

あさぢ ちうちう。どうまち  
たへ沙芽が系近き泥所とあんの多る北の廓不  
程も多、編笠茶坊の喜跡あていと旅り了所まら  
賣しき人の多く何と朝不炊く米さる。女不索む  
おひき。著し著る人由あり別てその容りびり氣不  
えある主婦の老ありけろが良人の二十とあるぐ。澤家ハ









物げて困窮さするのこゝろす。名もあはぬらの業病。  
 どのとどき足すまで。初ぬやう小出あるであらう。たゞし  
 とも。えちうとさう。あつてあつて。何時まを初  
 くと難儀せまうの。兩個が款くこゝろをあら。こゝろを  
 か須といひさひどあつて此のさうの。あつてあつて  
 りんぐらあ。かるおらう門のあつて。ハイちこあつて  
 まんト受て立出障子をあげ。ハイさあつてあつて  
 まんト受て立出障子をあげ。兩個つまゝ石審らへ西入の

二箇を初下西

「もしこゝろい幸ハさんと云作ちんう」ハイは格  
 どのいさう。おあさんうこゝろあつてあつて。ト受て立出障子を  
 ち振。小奴とつてさうして後のうこに控へ一権士も  
 大袂不果。こゝろのを脊負らむ。兩個はさ  
 小腰をうけ「お初小ああ小かろさう。私ども  
 浦赤の。赤治の店のものでござりませう。全体も  
 の様心が。通の替古をいへませませう。今う夜  
 二箇を初下西の赤色屋で。師匠さあつて大儀ひこ座

の芝居あそびも由よし俳優あしゅめ流りゅうが。見けんぶぶのの小こ舞まるるよよのの時とき。  
 そとにつひ抱だてだ大だ衆しゆ由よし肉にく養やうさんさんもも宿しゆく山さんがが一いつ世せいの  
 晴はまま赤あか治ぢとと由よしいいををままるるののがが藤ふじ林りん衣い堂どう衣い  
 ちちああせせららししねねととああらら申まうらら立た井い納な九く或あひひ  
 左さ庄しやうとと新あたらくく方かたくくイヤいッっッっどどりり粉こな小こああののてて在あるる  
 土ど中ちゆうををううけけままいいりり。漸あららじじくく好このこの呉ご服ふくらら出い来きなな。  
 ささくくここをを仕しととるるははいい。何なに方かたがが宜よろししうう。常じやうらら玉たま  
 入いのの仕し立た屋や由よしあありりまますすけけまますす。ああのの小こ藤ふじららやや。

三ッ  
 三ッ  
 三ッ

ああららくく其そのくく性しやうめめトト肉にく養やうさんさんがが氣きをを揉もでで。愈いふふまま。  
 ああのの世せいああららししことことももああらら。人ひともも依よりり知ちらら想さうがが。ああのの泥でい所じよ  
 のの形かたちりりのの新あたら小こ幸きやう八はちええんんととのの方かたががああるる。ああのの肉にく養やうさんさん  
 ののかか絹きぬさんさんのの女むすめででららををああとと仕し立たおおいい。ああのの席せきのの花はな土つち  
 中ちゆう心しんもも二にとといい下くだららぬぬをを利りどどがが。惜おぼししいいもも不ふ意い小こ舞まるる  
 てて。世せい間かんをを度どくくああああささららおおううらら。十じゆ人にんののああののがが九く人にんのの  
 ああららまま。ああののかか絹きぬさんさん小こかか粧まここ中ちゆう一いつわわアア。好このくく次つぎ身み  
 立た派はい小こ出い来きああららとと。突つきああすすののてて肉にく養やうさんさんがが。そそんんああらら





てまへ 妻 けり  
まき方より不くはして。よあお絹きん不ふんてんてん。  
仕立の注文の細り不書つけ。その中ふ入ふよとしてある  
と。分付らよとしてまありまよとしてまの四後トて下さ  
まートいひつ。袂裏をを解バ。新調縮子紗綾  
縮酒琥珀柳條古綴子あよび。金襴さよ堆言  
く。院如梅の類ひもあり。お絹のこまきよて「ヲヤ柱  
ろね。マア何人が私を。そのやう不云まよとして。以後の  
をり良人が長い病氣で書一 方不中。困でまよとして

テマの初下ま

ゆめん 木綿りの。天織細の縫りのをいして他のるを  
合せ。此方のつらさをあはせて。おまよひけまよとして  
の衣袋は殊不結構ある品。何れも私あふ出  
まき 来きまよとして「古箱あの一あまよとああさんまよとして  
本陰でまよとしてこのつ。見非あよとしてまよとしてまよ。  
他のものより面倒お衣袋のゆしてまよとしてまよとして  
仕立はつたに何れでも。おまよひ厭目いごまよとしてまよとして  
強つてつらまよとしてんの裡まよまよとしてまよとしてまよとして



